河上肇全集 第三巻

# 河上徹太郎全集

第二巻

勁草書房刊

河上徹太郎全集　第二巻

昭和四十四年六月三十日第一刷発行

著　者　河上徹太郎
発行者　井村寿二
印刷者　白井倉之助
印刷所　精興社
製本所　牧製本
発行所　勁草書房
東京都千代田区神田駿河台二ノ三
電話東京(二九四)六一二一
振替東京　一七五二五三

© T. Kawakami Printed in Japan

(落丁・乱丁本はお取替えいたします)

0390—831210—1836

# 河上徹太郎全集　第二卷

編纂委員

石川　淳

井伏鱒二

小林秀雄

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

# 目次

文學的人性論
第一部　新聖書講義
序……13
奇蹟について……17
愛の不公平について……22
信仰の心理性について……27
幸福について……31
愛の無報酬について……35
信仰と理智について……40
祈りについて……44
社會と神との相剋……49
ユダの信仰について……53
政治と宗教……62
第二部　名作女性訓
前置き……68

ボヴァリイ夫人……69
女の一生……73
椿姫……77
白痴……82
アンナ・カレーニナ……92
貴族の家……102
櫻の園……106
人形の家……111
自由主義の娘たち……116
狭き門……121
あとがき……126
新版へのあとがき……127

## 道徳と教養

序……131
生活の魅力について……132
有閑階級論……136
若さの道徳……141

恋愛の大衆性について……145
女の新しさについて……147
若さと教養について……153
青春の反逆について……159
嗜みについて……163
「解放」された女性像……167
民主々義への一つの反省……173
信頼ということ……177
近代女性一面……181
わがキリスト……186
私の俳句観……194
匿名批評について……197
政治漫画について……198
ポプラ論争……200
修身と君が代……201
愛国心について……203

*

戀愛文學と教科書問題……204
論爭と投書……208
讀書の頁……209
岡本かの子さんへ……211
私の批評家的生ひ立ち……212
日本映畫の心境性……217

私の詩と眞實

詩人との邂逅……225
神への接近……232
友情と人嫌ひ……239
シェストフ的不安……246
私のピアノ修業……253
わが樂歷……260
フランクとマラルメ……267
若い知性の抒情……274
認識の詩人……280
ロンドンの憂鬱……287

詩と人生の循環……294
あとがき……300

## わがデカダンス

序・わが戦後……303
横光利一とともに……308
井伏鱒二の詩と眞實……316
牧野信一をめぐつて……324
堀辰雄の位置……330
アンドレ・ジイドの問題……338
ジイドから青山二郎へ……349
中原中也の生き方……360
中也とヴェルレーヌ……369
わが戦前……376
わが戦後……384
あとがき……390

## 人間修業

私の人間修業……393

批評について……394
幸福と幸福論……400
幸福は美徳なり……405
生活智について……408
自分を知ること……410

## 文学的回想録

連載のはじめに……415
文学報国会のころⅠ……417
文学報国会のころⅡ……420
戦争中の中国にて……422
上海の憂鬱……425
揚州の旅……427
岸田国士氏の思い出など……430
上海の久保田万太郎……432
沖縄の旅から……435
大東亜文学者会議のころ……437
府立一中の友人たち……439

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

弔辞と祝辞……442
三好達治の追憶Ⅰ……444
三好達治の追憶Ⅱ……447
三好達治の追憶Ⅲ……449
佐藤春夫氏追悼……452
郷里岩国と友人たち……455
小林秀雄の「考へるヒント」……457
友人の全集のことなど……460
青山二郎のこと……463
十五年前の帰省日記……465
「椿姫」を見る……468
青山二郎と『陶経』Ⅰ……470
青山二郎と『陶経』Ⅱ……473
青山二郎と『陶経』Ⅲ……475
内村鑑三のこと……478
デカダンスの系譜Ⅰ……480
デカダンスの系譜Ⅱ……483

デカダンスの系譜Ⅲ……485
白鳥と鑑三……488
芸術院総会の一日……491
連載のおわりに……493
あとがき……496
アポリネールの戯文
解説……吉田健一……553
解題……大平和登……559

# 文学的人性論

# 第一部　新聖書講義

## 序

この題目の下に私がこれから續けてゆく一聯のエッセイは、聖句の解釋でもなければ、教義の研究でもない。その道にかけては、私は素人である。ただ私は、當代のわが藝文の徒の大多數と同樣に、ここ二千年の西歐の知的秩序の創始者である所のキリストの抱いた認識の方法に對し、飽くなき好奇心を有するディレッタントに過ぎない。だから私に許されてゐることは、この好奇心を應用して、社會なり文學なりについて、何ものかを見たり語つたりすることである。所が、今私がやらうとしてゐることは、この好奇心をば直接觀察の對象として、何か纏つたものを書かうとしてゐるのだ。無謀といへば大變な無謀である。思ふに人は、かういふ衝動を感じた時、正當に許された唯一の方法がある。それは自分のヤソ傳を書くことである。ルナン、パピニ、モオリアック、それから我が國では最近山岸外史氏の書いた「人間キリスト記」、皆さういふ目的で書かれたものである。しかも私の無力と怠惰は、今さういふものを書くことを許さない。さうなると、殘された途は、非常に主觀的な自己告白の記錄である。然しさういふものが讀者の方々に面白い譯がない。にも係らず、この度本誌の編輯者は、非常に寛大な申出を以て、この種のエッセイの連載を慫慂された。私はこの慫慂を以て讀者のそれの代辯であると率直に解し、兩者の御好意に甘えて、なるべく具體に卽しつつ、この難題に當つて見る。

更に別の一面から私の課題を見る。三百年前の南蠻渡來以來、又明治になつてからの信教の自由以來、キリスト教といふものは、我が國に十分の布教浸潤を見、今更その教へや制度習慣に奇異の感を抱く人もなければ、又宗教家として優に一家をなす人材も出てゐる。然し飜つて考へるに、これは我々がキリスト教の精神や教義や制度を受け入れて自分なりに身につけたといふことなのであつて、西歐二千年の傳統が自然に凝つて良識となつた先方の生活感情とは、全く別のものなのである。しかも先方では、キリスト教は、生活の中の靈的・精神的部分を受け持つてゐるといふだけでなく、日常生活を營むその際の、ものの感じ方、ものの考へ方の中にのつぴきならぬ型を嵌め込んでゐて、人はその鑄型の中で生きてゐるのだ。それに對し我々は、キリスト教に關する常識を備へてゐるために、それが理解出來るものだから、何の不都合も感じないのだが、我々の本能的な生活感情といふものは、實はこれと非常にかけ離れてゐるのである。かういつたからとて私は何も、例へばクリスマスに對する感情が、彼等にあつては內容を具へてゐるのに對し、我々の間では只ハイカラな風習に過ぎないといふやうなことだけをいつてゐるのではない。例へば、机の上にあるコップ一つ

見る眼も、兩者が根本的に違つてゐることをいつてゐるのだ。この差違は、實に多くの人が無意識のうちに看過してゐる所の、驚くべき盲點である。ただ彼等の風俗や思想を理解してゐるといふことと、その觀念の下に實地に生きるといふことは、根本的な相違がある。だから、西歐文化を一と通り取り入れた我々にとつて、我々のなすべき次の課題は、この差違を生活本能のうちに感得することである。これは今後の我々知識人にとつて大きな課題である。そして私の仕事は、この課題に對して何か手懸りを作ることにあるのだ。

羽左衞門が曾て外遊した時、パリでルーヴル博物館を見物し、古今の西洋美術の精華に接した後、人に語つた印象は、「何だ、みんなヤソぢやねえか！」といふ啖呵一つだつたといふ逸話がある。羽左衞門はもとより畫の題材についていつたに過ぎない。然しこの批評は洒落として考へて見るのに、實に重大な意味がある。西洋の文化は實は皆ヤソなのである。この單純な第一印象を跳び越えてものをいふために、人は實に重大な誤謬や迷妄に陷るのだ。誰がバルザックを讀みベートーヴェンを聽いて、何だ、こりやヤソぢやねえか！ と感慨を洩らした人があるか？ しかも錯誤は、バルザックやベートーヴェンがヤソであるなんて當然の限定で、今更そんなことを口にする必要はない、と信ずる所から、更に增大してゆくのだ。私が說きたいのは、羽左衞門のこの第一印象である、そして、我々には慣れつこになつてゐる西歐人の腦髓や心臟の動き方に、一々この疑惑をつきつけて、それを透して一應ものの姿を見直すことが必要なのである。

かういふと、私の課題は急に漠然と擴がつてしまつた。要するに西歐一般の考へ方見方の型が私の對象だとなると、手當り次第あらゆる問題が私の手の中に摑へられて際限がない。そこで初めて私は自分の仕事に纏りをつけるために聖書といふテクストを用ゐることになる。だから、聖書は私の目的ではない、手段なのである。

○

ヴァレリイは、西歐の沒落を說いた見事な論文「精神の危機」の中で、今日ある所のヨーロッパ精神を形作つた三つの要素として、ギリシャ人の理性の基礎となるべき幾何學の精神と、ローマ人の帝國の强大を來した法治精神と、ユダヤ人の產んだキリスト敎の精神を擧げてゐる。そしてこれらが爛熟して榮えた二千年の西歐文化の後に、今や——第一次大戰以來——どうにもならない行詰りが、文化全體から見て兆してゐることを分析豫言してゐる。では何故キリスト敎があの强大なローマ帝國の權力と結びついてヨーロッパを支配したか？ それはこの敎への中にある愛の精神の力には違ひないが、然しそれだけではなく、この敎への中にある世界觀を形作る一種の合理主義が、ヨーロッパ人の頭の動き方に、甚だよく適合するものがあるからに違ひない。そしてこのキリスト敎的世界觀、或はキリスト敎的認識論といふものは、從來の神學及び大部分の哲學がこれを體系づけ完成してゐる。然し私が今問題にしてゐる所の、何故に西歐人の頭の動き方や、ひいてはその影響の下にある近代一般の我々知識人の頭の動き方にこの考へ方が取り入れ



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com